

原 著

顕現性不安尺度 (Manifest Anxiety Scale) による 大学生の不安構造について

島田 修 寺崎正治

川崎医療福祉大学 医療福祉学部 臨床心理学科

(平成 5 年 3 月 31 日受理)

A Study of MAS (Manifest Anxiety Scale) in University Students.

Osamu SHIMADA and Masaharu TERASAKI

*Department of Clinical Psychology
Faculty of Medical Welfare
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurashiki, 701-01, Japan
(Accepted Mar. 31, 1993)*

Key words : MAS, MMPI, K-scale, F-scale

Abstract

The purpose of this study is to investigate the anxiety structure between university students who major in social science (S-Corporation) and those who major in technology (N-Co.).

We also try to examine some possible changes in anxiety level in both S-Corporation and N-Co. from year to year.

Finally, we discuss whether the MAS scale is useful for vocational guidance.

要 約

本研究は文系の大学生 (S 社を受験, 採用内定者) と理系の大学生 (N 社を受験, 採用内定者) との不安構造について検討しようとするものである。

次いで, 文系と理系の大学生の不安水準に年代的变化がみられるかどうかをたしかめた。

その結果, 年代的变化は認められなかったが, 毎年, 文系と理系の学生の不安構造は異なっていた。

MAS を適性検査の一つの手段として, 使用する際に, それぞれの母集団毎の基準を設定し, 不安の内容差, K および F 得点を考慮する必要性について述べた。

はじめに

顕在不安尺度 (Manifest Anxiety Scale, 以後, MAS と記す) は 1953 年にテイラー (Taylor, J.)¹⁾ が不安度の高低を弁別する為に考案したものである。これが不安を客観的にとらえようとしたものでは、事実上はじめての質問紙法による心理検査で、その後、行動論的不安研究に大きく刺激を与えた。

テイラーは MAS を学習実験において、被験者のグルーピングの手段に使用したいと考えていた。

MAS はわが国では、学習理論に指向性を持った心理臨床家によって標準化が行なわれている²⁾³⁾。そのために、パーソナリティ研究や臨床領域で用いられることが多い。

我々も、MAS に MMPI から K, L, F 尺度を取り入れて、精神科のさまざまな患者に適用し、特に妄想型精神分裂病患者のスクリーニング・テストとして有効であることを経験している。

また、1972 年より大学生の精神的不健康予知の一手段として MAS を使って、大学生の不安構造を捉えるとともに、採用内定者の適性指導を行なってきた。

企業の人事担当者の評価と我々が MAS によって下す学生の人物評価が合致しないことを経験する。体育会系の運動部に所属していた学生を人事担当者は協調性をはじめとして積極性にとみ、不測の事態において、軽重緩急をふまえた、タイミングの良的確な判断を下し得る者と、高く評する。

ところが、MAS による判定では、不安感が強く、受動的な対処行動に出ることが少なくないと、人事担当者と逆の結果を見る。そのような学生の何人かは就職後半年で離職した。

これほどまでに、極端な評価の不一致をみないでも、大学生の不安構造がかなり変化してきているのではないかと推断される。

このようなことから、大学生一般の不安構造の変化と大学生の母集団による不安構造の違いに、我々は関心を持っていた。

そこで、本論文は 1986 年から 1991 年まで、S 社

(文系専攻の大学生)、N 社 (理系専攻の大学生) に応募し、内定を見た大学生についての、不安構造について検討することを目的とする。

方 法

1. 対 象

S 社を受験し内定した男子学生 695 人、平均年齢 (22.2 歳 S.D.=0.92)。

N 社を受験し内定した男子学生 265 人、平均年齢 (23.47 歳 S.D.=1.43)。

S 社に応募した学生は学部卒業生が多く、N 社に応募した学生には大学院前期課程を終了したものが多いために両社の学生の年齢に有意差をみている ($t=13.60$ $p<0.001$)。

2. 検査の施行時期および方法

両社に応募した学生に対して、毎年 10 月から 12 月にかけての説明会の際、適性検査の一つであることと、記入方法を簡単に説明したあと、15 分以内で反応をするように求めた。

MAS のほかに S 社では TPI (MMPI の東大改訂版) を、N 社においてはバウムテストを実施している。

結 果

1. S 社、N 社採用内定者の年度別 A, K, L, F 得点の平均値と標準偏差

表 1 に S 社、N 社の学生の A, K, L, F 得点の平均値と標準偏差値を年度毎に示した。

なお、A 得点の範囲は 0—50 点であり、得点が高くなるほど、強い不安傾向や、神経質傾向を反映する。

K 得点の範囲は 0—30 点で、自分をよく見せたい自己防衛的態度が強いと高得点になる。

L 得点の範囲は 0—15 点で、虚構点ともいわれる。L 尺度については、社会的に望ましい行動ではあるが、だれもが殆ど実行できないような質問項目からなっている。

F 得点の範囲は 0—57 点で MMPI の希有尺度を援用したものである。この得点の高いことは、被験者はテストの教示を理解していないことや、不注意で出鱈目に反応していることを示す。さらに、精神科臨床の意味からいえば、外界の認知の仕方が主観的に傾くほど、F 得点が

表1 S 社, N 社採用内定者の年度別 A, K, L, F 得点の平均値と標準偏差値

		S 社				N 社				
年 度	人 数	A	K	L	F	人 数	A	K	L	F
1986	80	10.18 (5.04)	19.29 (3.35)	4.98 (2.04)	4.46 (1.92)	29	11.66 (6.59)	20.41 (4.71)	6.00 (1.96)	5.03 (2.49)
1987	78	11.23 (5.95)	18.81 (4.35)	4.92 (2.21)	5.18 (2.53)	37	12.68 (6.52)	18.76 (3.90)	5.68 (2.36)	4.70 (2.05)
1988	125	11.74 (5.03)	19.01 (4.24)	4.69 (2.07)	5.39 (2.10)	42	11.81 (7.28)	18.76 (4.83)	6.19 (2.41)	5.07 (3.86)
1989	120	10.97 (5.32)	18.62 (3.64)	4.73 (2.07)	5.12 (2.35)	51	12.53 (6.74)	17.82 (4.09)	5.33 (2.22)	5.12 (2.08)
1990	135	10.65 (5.61)	19.47 (4.14)	5.00 (2.01)	5.50 (2.94)	58	12.09 (5.81)	20.07 (3.44)	6.07 (2.29)	5.14 (2.31)
1991	157	11.29 (5.90)	18.56 (4.19)	4.68 (2.16)	5.41 (2.37)	48	12.23 (7.04)	19.02 (4.42)	5.71 (2.46)	5.35 (2.55)

高くなる。このような被験者は、自己と他人との関係を的確に認知することができずにいると考えられる。

さて、表1のとおり、我々が予測していた A, K, L, F 得点の逐年変化 (A が増加し K が減少の方向へ) は明確に捉えることはできない。A 得点は S 社, N 社ともに、1986年から1991年まで、1点前後の平均点の変動をみている。しかし、これらの変化は平均点の分散のなかに入るものであり一般的傾向とはいえない。

2. S 社と N 社の学生の A, K, L, F 得点の比較

表2は S 社と N 社の1986年から1991年までの採用内定者についての、A, K, L, F 得点を示したものである。

A 得点に関して、S 社の平均 A 得点が11.11 (S.D.=5.51)。N 社の平均 A 得点が12.20 (S.D.=6.59) となっており有意差をみている ($t=2.48$ $p<0.05$)。

L 得点に関して、S 社の平均 L 得点が4.80 (S.D.=2.09)。N 社の平均 L 得点が5.80 (S.D.=2.30) となっており有意差をみている ($t=6.48$ $p<0.01$)。

K 得点と F 得点においては有意差をみなかった。

3. S 社と N 社の学生の不安の内容差

MAS の A 項目を因子分析すると、5 因子が

表2 S 社, N 社採用内定者 (1986~1991年度) の A, K, L, F 得点の平均値と標準偏差値

	人 数	年 齢	A	K	L	F
S 社	695	22.2 (0.92)	11.1 (5.51)	18.9 (4.03)	4.8 (2.09)	5.2 (2.43)
N 社	265	23.5 (1.43)	12.2 (6.59)	19.1 (4.23)	5.8 (2.30)	5.0 (2.59)

抽出されていることが、従来より知られている (木下, 今田, 古賀, 1972⁴⁾)。そこで因子負荷量の高い項目を集めた5つの下位尺度のうち A 1 (慢性的不安), A 2 (自己不当惑) 尺度について両社の学生について検討してみた。

A 1 (慢性的不安) 尺度による不安内容差

「経済的なことや仕事のことを気に病む」 N 社>S 社

$\chi^2_{(1)}=13.29$ ($p<0.01$)

「実際には大したことでないことに訳もなく悩まされる」 N 社>S 社 $\chi^2_{(1)}=6.26$ ($p<0.05$)

「物事をむつかしく考える傾向がある」 N 社>S 社 $\chi^2_{(1)}=9.18$ ($p<0.05$)

慢性的不安尺度のなかで、「感情を傷つけられやすい」、「何かを心配している」、「面倒なことが起こりはしないか取り越し苦労する」、「誰かについて思い悩む」などの項目では有意差を見なかった。

A2 (自己不当惑) 尺度による不安内容差

「自分は役に立たない人間のように思う」 N 社>S 社 $\chi^2_{(1)}=7.08$ ($p<0.01$)

「危険や困難に出会うと尻込みする」 N 社>S 社 $\chi^2_{(1)}=10.05$ ($p<0.05$)

「困難なことが山積していて、とても乗り越えがたく感じることもある」 N 社>S 社 $\chi^2_{(1)}=14.07$ ($p<0.01$)

「実際には大したことはないことに訳もなく悩まされる」 N 社>S 社 $\chi^2_{(1)}=6.26$ ($p<0.05$)

「友人たちに比べて怖がりである」 N 社>S 社 $\chi^2_{(1)}=4.12$ ($p<0.05$)

「十分自信を持っていない」 N 社>S 社 $\chi^2_{(1)}=6.34$ ($p<0.05$)

考 察

1. 不安得点の逐年変化について

臨床の現場で青年後期の患者と接していたり、企業のメンタルヘルスについての相談をうけていると不適応状態に陥りやすい青年が多くなったとの印象を我々は持っていた。

そこで大学生の性格特性の逐年変化を調べ、理系と文系の大学生の性格特性について検討するべく、これまでの資料を整理した。

表1に見られるごとく1986年から1991年までの期間について変化を調べてみた。

A 得点をはじめ K, L, F 得点とも6年間に、1点前後の間で推移しているにすぎない。

大学生における特性不安の年度変化について、古賀、寺崎 (1985)⁵⁾の研究がある。1970年度より1984年度までの15年間ににおける心理学関係科目受講生で、大学1・2年生、平均年齢は18.5から19.3歳の者を対象に実施している。

A 得点は K 大学男子では1970年度の23.6点から1984年度の20.2点まで、3.4点の得点減少がみられ、傾向検定の結果でも1%水準で有意であった。

K 得点については、A 得点の有意な減少傾向とは逆に、有意な増加傾向を見ている。また、L 得点においては、15年間に有意な変化を見なかった。

不安の減少傾向について、古賀ら (1985) は、

その頃の青少年の意識調査にみられる「悩みや心配事」が減少してきているという結果に対応するものであろうと解釈している。

しかし、その後、社会背景の変化とあいまって若年労働者の離職率が高くなってきた。そこで、新人教育の在り方が、職場のメンタルヘルスの重要課題となっている。新入社員員の育成指導の在り方について、細かい点にわたるマニュアル化が進められもするが、その解決を、職場に求めても限りがある。新入社員研修期間中に精神的バランスを失う社員や入社三ヵ月後の最初の配属先で入社拒否をする職員の心理療法を行なっていると、早くは学生時代に精神的不健康状態を見せていたのではないかと推測することができる。

したがって、A 得点の逐年変化は増加傾向をたどり、K 得点は減少傾向をたどるのではと予測していた。しかし我々が対象とした学生集団ではみられなかった。たしかに古賀ら (1985) の被験者と比較して年齢が高く、S 社では22.2歳、N 社では23.5歳の学生を対象にしていた。

この MAS は年齢や性差、母集団の性質によって得点にかなりの変動がみられる。これまでの研究により得られた、年齢別や性別などによる不安得点、そして精神疾患患者群を対象とした不安得点について、大村 (1985) は表3のようにまとめている。この表においても同じ日本の大学生男子間で、平均不安得点が17.8、20.9と3.1点違った結果が出ている。我々が対象とした N 社の学生の平均年齢が高かったが、それとの比較で表3の一般男子 (18—24歳) の場合をみると、平均不安得点が19.2となっている。同じく、大学生の中でも異なった母集団といえる防衛大学校学生の平均不安得点は13.4で、我々の調査した学生群と近い結果をみせている。

これらの大学生群の不安得点の平均値を考慮合わせると、年齢が高いというよりも、就職内定場面という状況因子が平均不安得点を低くし、日常彼らが見せる自由度のある情緒性を制限していることが窺える。これらの自己防衛的な態度により、我々が予想していた逐年変化をみる事ができなかった。質問紙法による性格検査では多数の対象について調査できても、個人の

表3 顕在性不安尺度の平均値 (M) と標準偏差 (SD) に関するデータ

研究代表者	被 験 者	N	M	SD	発 表 年
Taylor	神経症者・分裂病者	103	31.9	11.2	1953
松永一郎	神経症者	95	26.2	8.6	1957
松永一郎	分裂病者	145	19.3	9.8	1957
杉山善朗	分裂病者・うつ病者 神経症者	47	24.0	8.2	1963
小川暢也	神経症者 (男子)	44	23.8	9.4	1963
小川暢也	神経症者 (女子)	47	25.6	8.2	1963
小川暢也	心身症者 (男子)	30	22.7	6.9	1963
小川暢也	心身症者 (女子)	33	22.1	8.4	1963
大村政男	神経症者 (男子)	50	25.6	9.5	1982
大村政男	神経症者 (女子)	44	26.5	10.3	1982
杉山善朗	外科患者	231	21.5	……	1963
杉山善朗	内科患者	186	24.4	……	1963
杉山善朗	結核患者	174	26.5	……	1963
Hedlund	大学生	2,723	14.9	7.9	1951
Hedlund	大学生 (男子)	1,259	14.3	7.8	1951
Hedlund	大学生 (女子)	712	15.4	7.9	1951
Taylor	大学生	1,971	14.6	7.9	1953
大村政男	大学生 (白人・男子)	232	14.9	8.3	1975
大村政男	大学生 (白人・女子)	241	17.1	8.8	1975
大村政男	大学生 (黒人・男子)	52	13.7	7.5	1975
大村政男	大学生 (黒人・女子)	85	17.4	7.6	1975
阿部・高石	大学生 (日本・男子)	163	17.8	7.4	1968
阿部・高石	大学生 (日本・女子)	76	17.8	7.6	1968
阿部・高石	成人 (20~60・男子)	729	14.3	7.8	1968
阿部・高石	成人 (21~35・女子)	102	17.8	6.1	1968
大村政男	中学生 (男子)	220	19.5	7.4	1981
大村政男	中学生 (女子)	226	18.1	7.3	1981
大村政男	高校生 (男子)	238	20.7	8.1	1981
大村政男	高校生 (女子)	264	21.3	6.9	1981
大村政男	大学生 (男子)	270	20.9	8.7	1981
大村政男	大学生 (女子)	265	22.6	8.0	1981
大村政男	一般 (18~24・男子)	227	19.2	8.4	1981
大村政男	一般 (18~24・女子)	290	20.3	8.8	1981
大村政男	一般 (25~50・男子)	206	18.8	8.9	1981
大村政男	一般 (25~50・女子)	135	19.1	8.2	1981
近喰・大村	自衛隊員 (男子)	604	12.5	8.5	1957
猪狩昌子	防衛大学校学生	489	13.4	8.0	1975
青山百合子	在日留学生	100	21.0	8.6	1976

大村 (1985)⁶⁾

内的世界と違った反応をみることがある。母集団の選択 (性差, 学部差, 学校差) によっても逐年変化の傾向が変わることが考えられるので,

我々の限られた被験者による結果から, 逐年的变化についての結論は控えたい。

2. S 社（文系大学生）と N 社（理系大学生）の比較

表 2 にみられるように平均不安得点は S 社の学生が 11.1 (S.D.=5.51) で N 社の学生については 12.2 (S.D.=6.59) となっている。平均得点の差はわずかではあるが、年毎にみても N 社の学生の平均不安得点が高く、その分散の値も大きくなっている。

L 得点についても有意差をみたが、S 社の学生の平均値が 4.80 (S.D.=2.09) で N 社では 5.80 (S.D.=2.30) となっている。

これらの結果から二つの学生集団の性格の違いを読み取ることができる。S 社の学生は物怖じすることなく行動的である。物事を肯定的に捉えようとしている。また、N 社の学生は行動を起こす前に考え込むことがあったり、L 得点が高いところから、S 社の学生よりも多少、奇を衒う面がある。

具体的には因子分析によって見いだされた下位尺度の慢性的不安尺度と自己不当感尺度でくまると両学生集団のプロフィールが出来上がる。

N 社の学生は神経症患者のように感情が傷つけられやすい、何かを心配している、取り越し苦労をする、などいけば不合理な心配はしない。けれども、緻密で合理的な心配をするタイプといえる。

自己不当感尺度にみられる反応の差は、N 社の学生が出会ってきた対象の領域や情報量が、S 社の学生が大学において学習し、取り扱ってきたものとは異質であることによって生じたものとする。

S 社は 1988 年 3 月末現在従業員 6,298 人を擁する。多くの大学生が抱く企業イメージも、営業マンとして海外に雄飛でき、世界に開かれた組織体と捉えられている。一方、N 社は 1993 年 2 月現在従業員 1,722 人 (81.3% が専門技術職で構成) を擁し、日本の代表的なゼネコンの設計、管理業務を引き受ける企業体である。

このように体質の異なった組織における適性検査の手段として、MAS を役立たせる場合、それぞれの企業集団の平均不安得点の 2 σ 高い不安得点を示し、かつ平均 K 得点の 2 σ 低い K

得点を示す学生を注意深く、指導する必要がある。

従来、MAS が臨床場面で使用されるとき、不安得点だけが取り上げられてきた。この MAS も因子分析研究によって⁷⁾⁸⁾、5～6 種の性質を異にする不安によって成り立っていることが明らかにされている。

幾種かの不安が総計されて不安得点が仮に 30 点の学生が二人いたとしても、ひとりの学生の K 得点が 9 点で、他の学生の K 得点が 25 点以上あると、前者は強い情動反応をみせる。それに加えて、もし F 得点が 15 点以上の高得点を示すと、自我機能の脆弱さが加わり、F 得点が高くなるにつれて、境界例から精神分裂病の初期症状を疑わねばならず、注意深い指導、観察が必要となる。

K 得点の高い学生の場合、身体症状（頭痛、不眠、めまいなど）に訴え、高い情動性を示さない。

また、神経症的不安症状を見せていた学生の改善は、不安得点の減少はあまり顕著でなく、むしろ、K 得点が高くなるにつれて、不安症状の消失が対応して見られる。

S 社の学生がもし A 得点が 25 点以上、K 得点が 10 点以下の場合、いきなり営業部門に配属しないで管理部門で業務の流れを把握させてから、比較的穏やかに展開する取引関係部門に配属することによって職場の適応をはかる。

N 社の学生には業務内容の特殊性から個性の強い者が含まれてくる。S 社であれば不適応を見せると考えられるような、独創性を備えた学生が N 社では求められている。そのため MAS による基準も、同じ年齢層の理系の学生とも違ったものを適用しなければならない。N 社の技術者も、構造、電気、土木、意匠の部門別によって、それぞれ異なった資質が求められる。当然のことながら、MAS の結果を読み取るにも、判断の基準を変えていかなければ、妥当性のある情報を提供することができなくなる。

おわりに

学生生活指導、精神科診療、職場のメンタルヘルス相談を通じて不適応状態の大学生に接す

ることが多いことから、青年後期に特徴的な変化が見られるのではないかと予測していた。

そこで大学生の不安構造について、逐年的な変化が見られるか検討を行なった。

その結果、1986年から1991年の間では、逐年的変化を確かめ得なかった。卒業または終了年度における、採用内定場面で MAS が実施されたため、多くの学生は、普段の自己像よりも、理想化して評定していると推定される。このため、毎年変わることのない、S 社、N 社向きの

性格特性を示すことになったものと考えられる。このことは S 社と N 社との間で、A 得点と L 得点や不安内容差に有意差を見たことから推測できる。

我々は A 得点だけでなく、K 得点、F 得点との関連において、A 得点の行動予測的意義について考察した。

その上で MAS が適性検査として有効であることを確かめた。

参 考 文 献

- 1) Taylor JA (1953) A personality scale of manifest anxiety. *Journal of abnormal & social psychology*, 48, 285—290.
- 2) 松永一郎 (1957) 不安テストの標準化について (4). 日本必理学会第21回大会発表論文抄録, 341.
- 3) 松永一郎 (1958) 不安テストの標準化について (5). 日本心理学会第22回大会発表論文集, 184—185.
- 4) 木下功, 今田寛, 古賀愛人 (1972) MAS について そのII —— 因子分析の結果から ——. 心理学会第36回大会発表論文集, 468—469.
- 5) 古賀愛人, 寺崎正治 (1985) 大学生における特性不安の年度変化 (1). 日本心理学会第49回大会発表論文集, 685.
- 6) 大村政男 (1985) テーラー不安スケール. 野上芳美編, 精神科 MOOK. NO. 10. 心理検査法, 初版, 金原出版, 東京, pp99—107.
- 7) 大村政男 (1971) 人格の因子論研究 —— MAS について ——. 日本心理学会第35回大会発表論文集, 199—200.
- 8) 古賀愛人 (1979) 不安の因子分析的研究. 園田女子大論文集, 14, 37—52.